

聖書：使徒9：32～43

説教題：タビタ、起きなさい

日時：2013年11月10日

使徒の働き9章で回心へと導かれたサウロは、一旦タルソへ退き、代わってここからしばらくは12使徒のリーダー、ペテロの働きが記されます。彼は「あらゆる所を巡回した」と32節にあります。ステパノの殉教をきっかけとして散らされた信者たちが行く先々でみことばを宣べ伝えた結果、あちこちにキリスト者の群れができるようになりました。前回最後の31節には、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられたとありました。ペテロは前にサマリヤに下って行って主のみわざを確認しましたが、エルサレムに戻って報告した後、改めて本格的な巡回伝道に出発したのでしょう。各地の信者たちを訪ねて、みことばをもって教え励まし、彼らをフォローアップするわざに没頭していたのでしょう。そんな中、起こった二つの出来事について今日の箇所は書き留めています。

一つ目はルダにおける出来事です。このルダはエルサレムから北西に40キロほど行った町でした。そこでペテロはアイネヤという人に会います。彼は8年間、床に着いたままの中風を患っていた人でした。中風とは体が麻痺して自由が利かなくなる病です。特に下半身が思うように動かないために、床に着いたままの生活を余儀なくされる場合がほとんどでした。その彼に向かってペテロは癒しの宣言をします。「ペテロは彼にこう言った。『アイネヤ。イエス・キリストがあなたをいやしてくださるのです。立ち上がりなさい。そして自分で床を整えなさい。』すると彼はただちに立ち上がった。」

この癒しの奇跡は、イエス様の姿を彷彿とさせるものです。イエス様も中風の人を癒されたことがありました。ルカの福音書では5章17節からのところに記されていました。多くの人々がイエス様を囲んでいたために、4人の友達が天上の屋根をはがして中風の人を吊り降ろしたというあの出来事です。イエス様はあの時、命じました。「あなたに命じる。起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい。」するとその人はたちどころに人々の前で立ち上がり、寝ていた床をたたみました。それとそっくりのことがここで起きます。8年間、床に着きっぱなしだった彼が、ペテロの言葉を受けてただちに立ち上がります。まるでイエス様のみわざをビデオで再現するような出来事が、このルダの町で行われたのです。

しかしイエス様とペテロとの間には、大きく異なる点もありました。それはイエス様はご自分の権威によってこのことを行なわれたのに対し、ペテロはイエス様の権威によってそうしたことです。彼は34節で最初にこう言いました。「アイネヤ。イエス・キリストがあなたをいやしてくださるのです。」 ペテロがこのみわざを行なうことができたのは自分の力によったのではなかったのです。彼はただイエス様の御名において、このことが行なったのです。

私たちはここから、イエス様は昇天してからも以前と同じように、いやもつと力強く働いておられることを知ります。今日の記事がイエス様を彷彿とさせるのは当然です。なぜならそこで働いているのはイエス様ご本人だからです。使徒の働き1章1節には、この使徒の働きではイエス様が行ない続け、教え続けられた事柄を書き記して行く、というルカの言葉がありました。イエス様は天に昇られて、この世と関係のないところに行ってしまうたのではありませ

ん。イエス様は天上からご自身の働きを継続しておられるのです。

私たちはこの癒しの記事に大きな希望を与えられます。この記事は、主が与えてくださる救いの素晴らしさを私たちに示しています。主の救いとは第一に罪の赦しを私たちに与えます。罪こそ私たちの最大の問題であり、それが神と私たちの関係を破壊し、私たちに様々な苦しみや不調和をもたらしています。イエス様はこの解決のために来てくださいました。しかしその罪が解決するなら、私たちの肉体も神が本来意図した祝福の状態へと回復されることとなります。そのことがこの中風の男の癒しに、私たちの目に見えるようにして示されているのです。

私たちはこの世にあって様々な弱さに悩まされます。しばしば健康を崩しますし、病気にもかかりますし、老化現象とも戦わなければなりません。しかし主は私たちの心ばかりか、私たちの肉体も回復してくださるのです。この世で悩むあらゆる肉体的弱さにも素晴らしい解決を持って下さるのです。やがて私たちは天国で何の問題もなくピョンピョン飛び跳ねることが出来る健康で頑丈な体を頂くのです。そのような救いが、ここに絵のようにして私たちの前に示されているのです。

続くヨッパではさらに大きなみわざが行なわれます。ヨッパはルダからさらに北西に 20 キロ弱行った町で、地中海の海沿いの町です。そこにタビタ、ギリシヤ語でドルカスという女の弟子がいました。この名前は欄外に注がありますように「かもしか」という意味です。彼女は多くの良いわざと施しをした人でした。その彼女も病気になって死んでしまい、人々は遺体を洗って屋上に置きます。そしてペテロがルダまで来ていると聞いて、彼を呼んだのです。ペテロが到着すると、「やもめたちはみな泣きながら、彼のそばに来て、ドルカスがいつしよにいたころ作ってくれた下着や上着の数々を見せるのであった。」と 39 節にあります。「見せる」と訳されている言葉は「自ら見せる」という表現で書かれていて、これは彼女たちがこの時、あるいはこの時もとと言った方が良いかもしれませんが、タビタが作ってくれたものを身に着けていたことを示しているのでしょう。彼女たちはタビタによって助けられて来ました。彼女の愛のわざによって支えられて来ました。その彼女が死んでしまい、涙をぼろぼろ落としながら悲しんでいたのです。そんな中、ペテロはどうしたでしょう。彼の行動はまたしてもイエス様を彷彿とさせるものです。思い出されるのは会堂管理者ヤイロの娘の生き返りの記事です。あの時、イエス様は人々をみんな外に出してから奇跡を行なわれましたが、ここでもペテロはみんなの者を外に出します。そして遺体に向かってこう言いました。「タビタ、起きなさい」この「起きなさい」という言葉は、ペテロがこの時話していたであろうアラム語では「クミ」という言葉です。つまり彼はここで「タビタ、クミ」と言ったわけです。これはかつてのイエス様のことばとほとんど同じです。イエス様はヤイロの娘に向かって「少女よ、起きなさい」「タリタ、クミ」という言葉を発されました。それと一文字違いの言葉をペテロはここで発したのです。すると彼女は目を開け、ペテロを見て起き上がったとあります。そしてペテロは手を貸して彼女を立たせ、聖徒たちとやもめたちとを呼んで、生きている彼女を見せます。またしてもかつてのイエス様のみわざを再現するようなことが起こったのです。

しかしここでもイエス様とペテロの大きな違いが一つありました。それはペテロがこの癒しを行なうに先立って、ひざまずいて祈ったことです。ペテロはここでもイエス様の力により頼んでこのことを行ないました。つまりこの奇跡を行なった本当の方は、天から働いておられた

主であったということです。ペテロを用いて天上の主が、死の力にさえも打ち勝つみわざをこのように行なわれたのです。

以上の箇所を私たちはどのように読んだら良いでしょうか。改めて思われることは、先にも述べましたように、イエス様は今この時も生きておられ、天からみわざを続けておられるということです。イエス様は天に昇って、過去の人となられたのではありません。福音書の時代にはよりリアルにこの世で働かれたが、今はそうでないというのではない。イエス様は変わらず天から働き続けておられるのです。その天上のご自身と地上の私たちを結び付けるために、イエス様は聖霊を遣わされました。私たちは今この時も、天にいるキリストと結ばれ、その方の祝福を受けて歩むことができるのです。

しかしある人は思うかも知れません。ではなぜ、今日もこのような奇跡は起こらないのか、と。ある人は告別式の際に、棺の中の遺体に向かって故人の名前を呼び、「起きなさい！」とやって、参列者一同のひんしゆくを買ってしまったそうです。なぜ今日はそのようなことが起きないのでしょうか。それは当時は、まだ聖書が完結していなかったことと関係しています。新約聖書時代に見られた様々な奇跡は、イエス様が天に昇られた後、特に使徒たちによって行なわれました。それは彼ら新約聖書の土台となる使徒たちのメッセージが神からのものであることを確証する意味を持っていました。また多くの学者はここでのペテロの奇跡は、このあと彼は特別な働きのために用いられますが、その彼が確かに神の器であり、信頼に足る者であることを改めて示すためにも必要だったと言っています。また私たちは当時でさえ、奇跡は抑制的にしか行われなかったことも考慮すべきです。新約聖書に出て来る死人の生き返りの記事は何回あるでしょうか。全部で5回です（イエス様が3回、ペテロが1回、パウロが1回）。ある意味、たったこれだけです。しようと思えばいつでもできるみわざなら、もっと多く行なわれても良かったのではないのでしょうか。しかし、地上における奇跡はあくまでしるしとしての奇跡です。それは5回もあれば十分です。病についても同じことが言えます。パウロはテモテに、胃のためにまたたびたび起こる病気のために少量のぶどう酒を用いなさいと言っています。もしパウロに癒しの奇跡を行なう力があるなら、どうして一発でその愛弟子の弱い部分を直さないのでしょうか。しかし救いの完成はやはり将来に属することなのです。たとえ今ここでその始まりを味わうことができても、完成は将来にあります。それまでの奇跡は予告的なもの、前味的なものでしかないのです。天国の祝福は、やはり天国に行った時に与えられるのです。

しかしこのことは、地上では私たちは実質的な祝福を何も受けないということではありません。主を信じる者は、この世にある時から主の恵みの中に生きます。私たちはなお地上にあるがゆえの病を経験し、弱さを経験し、死を経験します。しかし主を信じる者は、たとえ死を経験しても、死の針は抜かれていると聖書は語ります。つまり地上における死はもはや私たちを滅ぼす力を持っていない。病も然りです。イエス・キリストにあつて、そこから呪いの要素は取り去られている。それは私たちに損害は与えず、むしろ私たちの益に役立つものとして、やがての永遠の命の祝福につながるものとして主が用いてくださるのです。

ルダの町とヨッパの町の人々は、それぞれの町で行われたみわざを見て「主に立ち返った」あるいは「主を信じた」と35節また42節にあります。彼らは自分の身に同じ奇跡が起きなくても、私たちの病や死の問題にも解決を持っておられる主が、自分たちのこれからの生涯を支

配し、やがて永遠の命に導き入れてくださることを信じたのです。タビタもそうでしょう。彼女もやがてもう一度、死の日を迎えたでしょう。その時、彼女は同じ奇跡が行なわれることは望まなかったでしょう。彼女は死に打ち勝つ力を持つ主が、死を越えたところにある自分をも守り導いてくださることを告白しながら、主に委ねる幸いに生かされて行ったことでしょう。

私たちも引き続き、この世にあつて様々な弱さ、病、老い、そして死に直面します。しかしこれら一切に解決を持っていてくださる救い主がここにおられます。私たちの身代わりの十字架と復活のみわざを通して、より頼む者を罪の滅びからの救いと心身両面に渡る祝福へと導いてくださる方がおられます。そのお方は今日も生きておられ、天上から力強い御手を持って、ご自身とつながる者をいのちの恵みに生かしてくださいます。私たちはルダやヨッパの人々のように、この主に立ち返り、この主を信じて、主が導いてくださる永遠のいのちの光の中を歩む者とさせていただきたいのです。